The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

# 済暹の『四種法身義』における法身説法論

マシュー・マクマレン

仁和寺の済暹はその著作『四種法身義』において、空海の『弁顕密二教論』と安然の『教時問答』における法身説法説を比較している。これらの二説の差異を解き明かす際、済暹は証文として様々な経論や註釈書を参照するなかでも、とりわけ『大乗密厳経』（以下、『密厳経』と略す）を重んじた。先行研究は空海と安然の法身説法思想が済暹の法身観に影響を与えたことを指摘しているが、こうした法身観と『密厳経』の所説との関連について、まだ触れていない。[1] 小稿では『四種法身義』において、済暹が『密厳経』を法身説法思想にいかに取り込んだのかについて考察したい。

『四種法身義』の最初の問答において、済暹は安然と空海の法身説法説の差異を説明している。[2] 安然は『教時問答』巻一において、天台の仏身論上で重要視される『観普賢経』[3]に従い、釈迦如来と大日如来とが等しく、また、真言密教の大日如来が他受用身に住することを説示している。[4] 一方、空海は『弁顕密二教論』巻下において、『大日経』を説く毘盧遮那と釈迦牟尼について「各各不同。応二当知一之。」[5]という主張をしている。[6] このように、空海と安然の法身説法説の差異が明らかになることによって、『四種法身義』における問題点が浮き彫りになる。すなわち、済暹は真言宗僧侶としては空海の教説に準ずるべきであるが、彼は安然にも多大な影響を受けているので、どちらの仏身論を採用するかという問題が生じるのである。具体的には、大日如来のみが法身であるか、もしくは仮の仏身としての釈迦如来等も法身であるかという疑問が起こるのである。

この問題について、済暹は『密厳経』を取り上げて、言及している。『密厳経』の漢訳には日照の旧訳三巻と不空の新訳三巻がある。[7] 空海は日本へ初めて新訳を請来したことが『御請来目録』[8]によりわかるが、この目録以外では、『密厳経』に言及していない。また、安然は『諸阿闍梨真言密教部類総録』[9]巻上において旧・新訳を記し、更に『教時問答』と『菩提心義抄』の中で両訳を引用している。これらを踏まえた上



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



で、済暹は『四種法身義』において、『密厳経』と『大日経』や『金剛頂経』などの密教経典を関連づけて論じている。[10] すなわち、以下のように不空訳の『密厳経』巻下を引用している。

又密厳経云、所説勝理趣密厳無畏法。彼諸瑜伽者聞レ説レ如レ是已、得二自覚聖智・内証之境界一。文 故知、此経至極義也。其義同二大日経・金剛頂経深旨一也。[11]

これによれば、『密厳経』の所説は優れているので、行者がこの説法を聞けば自覚聖智を得るのであり、『密厳経』は『大日経』や『金剛頂経』と同様に究極的な教えであるという。また、済暹は密厳土の仏に関する問答において、日照訳の『密厳経』巻上を引用し、以下のように論じている。

問。如何知下一切仏身及余一切法是法身之支分故名二法身一意上耶。
答。（中略）密厳教云、仏常密厳住、像現レ従二其国一。住レ真而正受、随レ縁衆像生。如下月在二虚空一顕影中鑑於諸水上。如二摩尼衆顕影、色合而明現一。如来住二正定一現レ影亦復然。譬如二形与レ像非レ一亦非レ異。如レ是勝丈夫成二諸事業一。文 意云、仏実法身恒住二密厳土一。以二影像仮身一為二有縁衆生一以示二現影像之他受用・変化・等流身一言也。猶如下本月在二虚空一以二影像一浮中衆水中上也。此法・喩全合也。[12]

ここでは、密厳土に住する仏は実の法身であり、衆生のためには影像の仮の身として他受用身・変化身・等流身を現ずることを明らかにしている。要するに、『四種法身義』の趣旨は密厳土の仏が自受法楽の中に説法することを論じ、この実の法身が四種法身の中の自性・自受用身であると提示している。この故に、済暹は『密厳経』の教説が「至極の義」であると述べている。しかし、注目すべきは、済暹が密厳土に自性・自受用身が住すると言いつつも、他受用身が住していないとは論及していない点である。それに関して、次の問答を記している。

問。何故必以二此密厳経一而了為二至極義一耶。
答。此経是述二是真言宗至極義一也。所以者何、示下現釈尊方住二他受用一法身相之儀式上而説二此経一。其所説義理微極甚深法然常住境界。[13]

この答中において、済暹は『密厳経』が真言宗の究極的な教えを説く経であり、衆生がこの教えを理解できるように、釈迦尊が他受用身に住し、法身の様相を示現し、『密厳経』を説くことを論じている。このことは次の問答において、さらに明確に説明されている。

問。此処中所レ明密厳国土者、是為二自性法身土一、為二他受用報身土一耶。
答。私案云、是他受用報身之変易土也。所二以知レ爾者、指二密厳土一言二如無為性一。又、云二如涅槃及以非択滅等一故也。[14]

右の記述では、密厳国土は他受用身・報身の変易土であると判じられている。[15] この説明は密厳土に住する仏身が実の法身すなわち自性・自受用身であるという主張と矛盾するよう



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

に見える。しかし、既に挙げた「密厳土において影像の他受用・変化・等流身を示現する」という文に依拠して論ずれば、納得がいく。つまり、済暹の密厳土観によれば、密厳土は実の仏が自受法楽より他受用身・報身として釈迦を現じる仏土である。

密厳土は自性・自受用身の仏土であるとともに他受用身も住するという説明は、安然の密厳土説に影響されたものに他ならない。安然の法身土説について、『菩提心義抄』巻三において、以下のような記述が見出される。

天台云、円教法身釈迦亦名二毘盧遮那一、其仏住処名二常寂光一。四十一地・分証報身住二果報土一。分証法身住二分寂光一。此円教仏他受用身、現二別教仏一亦現二十地能応・報身一。此円教仏以二勝応身一現二通教仏一、以二劣応身一現二蔵教仏一。(16)

ここで言わんとするのは、天台円教によれば、法身の国土は『観普賢経』の所説のように釈迦を毘盧遮那と名付けて常寂光土に住し、分証即の報身が実報無障礙土に住し、また、円教の他受用身が別・通・蔵教の仏身を顕現するということである。しかも、安然はこの円教の法身土説と密厳土について、『教時問答』巻三において以下のように述べている。

密厳経云、密厳仏土是大智慧。是大寂静。故是寂光・実報二土。今云二十方浄厳一此是十方浄土他受用・変化二土。故不レ可下以二厳一字一相中濫密厳上。(17)

この主張の重要性は、密厳土には法身が住する常寂光土だけではなく、報土も含まれることである。先行研究の指摘する通り、(18)安然はこうした他受用身の住する仏土を明瞭にしていないという問題があるが、この説は済暹の密厳土観に影響を与えたと考えられる。前引した『菩提心義抄』の記述のように、報土は四十一地すなわち初住以上等覚以下の報身仏土であり、また『教時問答』によれば、この土と法身・自受用身が住する常寂光土であるとともに密厳仏土である。同様に、済暹は密厳土の仏が実の法身であり、その法身の影像として他受用身・報身の釈迦も密厳土に住して『密厳経』を説くと述べている。要するに、済暹は法身説法論について、安然の著作に基いて釈迦を大日と名づける法身が密厳土に住すると論じながらも、『弁顕密二教論』の教説に従って密厳土の中の他受用身・釈迦の三身と、自受用身・大日の三身とが不同であると提示している。このように、『密厳経』の所説によって、安然の法身土説と空海の四種法身説とを融合させたのである。

要点をまとめておく。すなわち、済暹は空海の法身説を重んじ、『弁顕密二教論』を「真実ノ四種法身ノ仏」の教説と書き記している。言うまでもなく、空海の教説を根本としているが、『四種法身義』において『密厳経』を解釈する際には、安然の法身土説に依拠することによって、空海には見られな



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



かった法身土説法思想を展開していることに注目すべきである。

1　特に、金山穆韶「大日経の教主に就いて（三）」（『密教研究』四八、一九三三）、堀内規之「済暹の法身観について」（『済暹教学の研究――院政期真言密教の諸問題――』ノンブル、二〇〇九）、田戸大智「済暹の教主義について――安然説の受容――」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四七、二〇〇三）参照。

2　『四種法身義』（大正七七・五〇二頁上）。「問。就二秘密曼荼羅宗意一判二仏身一、而立二幾法身義一耶。答。略有二二義一。一者凡以二一切経論所説三身・四身仏一而為二法身義一。二者唯以二法界宮密厳土中一主伴互為二自受法楽四種仏身一為二真実四種法身仏一也。自余名為二摂末帰本法身義一也。初義安然闍梨等所存義也。後義高野大師所立義也。」。小稿で『四種法身義』を引用する場合、返り点は筆者によるものである。

3　大正九・三九二頁下。

4　大久保良峻「五大院安然の法身説法思想」（『印度学仏教学研究』三五―一、一九八六）参照。

5　『弘法大師全集』巻一・五〇二頁。

6　堀内規之「済暹の法身観について」参照。

7　北尾隆心「『大乗密厳経』について（二）――不空三蔵における『密厳経』――」（『智山学報』三五、一九八六）参照。

8　大正五五・一〇六一頁下。

9　大正五五・一一二〇頁下。

10　済暹は旧訳を引用する際、安然と同様に言及しているので、しばしば孫引きしていると考えられる。

11　大正七七・五〇五頁下。不空訳『大乗密厳経』（大正一六・七七〇頁下～七七一頁上）。

12　大正七七・五〇五頁上中。不空訳『大乗密厳経』（大正一六・七四九頁下～七五〇頁上）、また、日照訳『大乗密厳経』（大正一六・七二五頁中）。

13　大正七七・五〇五頁中。

14　同右。

15　変易土とは一般の分段的な三界六道の生死の場であるに対して、障害を除いた清浄な国土である。このため、『密厳経』にはこの仏土は、涅槃と非択滅性のように、有為がなく、常寂静の処である。吉蔵撰『勝鬘宝窟』（大正三七・五四頁上）、織田得能『仏教大辞典』（大蔵出版、一九七二）七七九頁参照。済暹は変易土の定義について、元興寺願暁撰『大乗法門章』を引用している。（日本大蔵経六一・二七七頁下～二七八頁上）。

16　大正七五・五〇八頁中。

17　大正七五・四二七頁下。

18　大久保良峻「五大院安然の国土観」（『天台教学と本覚思想』法蔵館、一九九八）参照。

〈キーワード〉　済暹、『四種法身義』、密厳土、安然

（早稲田大学交換研究員）



NII-Electronic Library Service